

雑学 鳥獣植物戯詩

第22回【愛甲石田のなまず】

全24回

八木幹夫

神奈川県厚木市愛甲石田にある叔母（母の妹）の家に泊まりに行くのが夏休み恒例の楽しみだった。従弟（いとこ）は一歳年下だが、背も高く、運動神経もいい。絵を描くのが得意で、当時、全国子ども絵画展で特選になったり、陸上大会でも地域のリレー代表選手に選ばれ、取柄のない私とは対照的だった。

早朝、家の前の用水に架かる小さな橋を渡って田圃の方へ駆け出す。朝霧のたちこめる稲のみどりが地平線まで広がる。白く動くもの。白鷺だ。小魚をくわえ、嘴を天にむける。畦にはレンゲ草が赤紫の遅い花を咲かせ、葉かげで蝗がじつとしていいる。葉のふちには夜露。霧が晴れてくると空から雲雀の声。遠くで牛が鳴いている。バケツで冷たい水を掬うと小魚が入った。

これから用水のカイボリをするのだ。雑草を引き抜き、束にして水の流れを止める。ねっとりしたへドロが澄んだ水をにぎらせる。体をくねらせ泳ぐものがある。「こっちにバケツ！」へドロもろとも畔道へバケツを振り上げた。そいつは長い髭と大きな口を動かした。見たこともない生き物だった。従弟が笑っている。